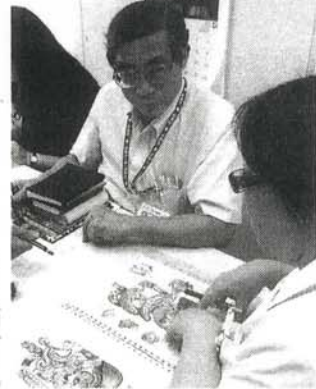


# 観光客増と東京五輪で 需要高まる医療通訳

日本語ができない患者が安心して治療を受けられるよう支援する医療通訳の活躍が期待されている。日本を訪れる外国人が増え、2020年の東京五輪開催を控えて需要が高まるのは確実だ。積極的に取り組む病院があるほか、国や東京都も対応に乗り出した。



看護師(右)から体の仕組みについて説明を受ける野口淑宏さん。8月、大阪府泉佐野市のりんくう総合医療センター



外国人講師から語学研修を受ける看護師や薬剤師ら。8月、東京都渋谷区の都立広尾病院

8月上旬、りんくう総合医療センター(大阪府泉佐野市)の産婦人科。岸和田市在住で妊娠中の謝丹丹さん(25)が「食べる」とむかむかして吐いてしまつ」と中国語で医師に訴えた。通訳の郭静儀さん(49)が日本語に訳すと、医師が「無理に食べなくていいので、水分を十分取つてくだ

さい」と答え、郭さんが中国語で伝えた。謝さんは近所の病院では国語で伝えた。通訳は医師にとっても重要な役割だ。同センターでは65人の有償、無償のボランティアが活動する。国際診療科部長の南谷かおりさんは英語やスペイン語でも診察するが「正確な診断や

## 外国人患者に安心感



日本に来た外国人旅行者の数  
1964年70 80 90 2000 10 13  
【法務省資料から政府観光局が集計】

センターで通訳に支払われる報酬は1日5千円と交通費。さらに高い報酬と身分を保障する仕組みが必要」と南谷さん。法務省によると、在留外国人の数は約200万人(13年末)。政府観光局の集計では、13年に日本を訪れた外国人旅行者は1千万人を突破した。厚生労働省は本年度、全国10病院で英



診察を受ける謝丹丹さん(奥)と医師(右)の間で通訳する郭静儀さん。8月、大阪府泉佐野市のりんくう総合医療センター

語、ポルトガル語、中国語の通訳の採用に半額を補助するモデル事業を実施。東京五輪開催までに30病院を公募で選ぶ予定だ。東京都も外国人患者に対応するため、本年度、都立

病院で看護師や事務職員向けに語学研修をしている。問診票の記入方法の説明や症状を聞くときに必要な英会話を外国人講師から学ぶ。りんくう総合医療センターでポルトガル語の通訳をする野口淑宏さん(67)は、ブラジル勤務時代、子どもが病気になる、現地の医大生に助けられた恩返しのため通訳を始めた。血を見るのが苦手で、医学の知識もなかったという野口さん。間違つたと大変なので、専門用語は必ず医師から説明を受けている。緊張するが、感謝されるとうれい」を派遣するNPO法人多言

を派遣するNPO法人多言